

# 米国サマースクールキャンプでの異文化体験研修

## Experience of American Culture by Participating

Summer School Camp

海野 優

ウミノ・リサーチ&トラベル・アシスタンス

Umino Research & Travel Assistance

異文化理解を目的とした教育プログラムが様々な形で試行錯誤される中、2000年から独自の異文化体験プログラムを実施している東京の私立T小学校では体験研修の内容をさらに斬新的なものに改善した。従来の語学研修に代えて、現地の私立学校のサマースクール・キャンプに参加するという短期留学の疑似体験を通し、英語の実践学習と、異文化に固有の社会規範を学習体験させようというものである。この実験は2001年と2002年の結果の報告である。

キーワード：英語実践学習、サマーキャンプ、異文化体験学習、異文化理解

### はじめに

T小学校では、2000年から、5年と6年生を対象とする「異文化体験研修プログラム」を実施している。第1回目のパイロット・プログラムの成果から、異文化を理解することは対象とする国の歴史や社会システムとともに、その文化に固有の「社会規範」や「生活規範」を理解することが重要であるという認識をもつにいたった。そこで、2001年と2002年の異文化体験プログラムで新しい実験を行った。サマースクール・キャンプという現地の教育プログラムに参加し、アメリカ人生徒とともに学習活動を体験するというものである。小学校ではなかなかできない交換留学を疑似体験しながら英語の実践的学習を強化するとともに、アメリカ文化の「社会規範」と「生活規範」にふれさせる体験を目的とした試みであった。言いかえれば、文化的背景や資質の異なるアメリカ人生徒と一緒に教育活動を体験することで、異文化の生活と行動様式を自分の目で観察し、さらに自他の文化の相違を比較学習させようというものである。新しい実験は、生徒をサマー・スクールという夏期学校に体験入学さ

せることを主軸とし、文化・社会・歴史を学習するためのフィールド・トリップと生活文化の体験学習であるホームステイによって構成された。

この新しい試みが、「英語の実践学習」と「異文化理解」においてどの程度まで教育効果をもちえたかを検証してみた。

### 方法「サマースクール・キャンプへの参加」

T小学校5年6年の生徒25名が参加したサマースクール・キャンプは、ワシントンDC郊外マックリー市にある私立校主催の「アドベンチャー・キャンプ」という夏期学校である。小学校2年から6年生までを対象としたこのキャンプには、周辺地域からおよそ300人の生徒が参加している。T校生徒が参加したのは、毎年7月後半の2週間であった。

キャンプのカリキュラムは、「アカデミック」、「アート」、「ミュージック」、「スポーツ」、「スペシャル・アクティビティ」とよばれる5科目から構成され、各科目には5から7クラスの選択肢が準備されている。例えば、アカデミック科目には、フランス語、スペイン語、ESL、算数、創作、タイピン

グ、そして自然観察のクラスがある。キャンプは、30分の昼食時間をはさんで午前9時から午後3時まで、一日6クラスの構成となっている。

T校生徒は、朝夕のスクール・バスを利用して通学し、学校に到着すると各自のホーム・ルームで出席をとった後、それぞれの選択クラスに毎時間移動した。生徒達のほとんどは、ESL、テニス、バスケットボール、衣服アート、美術・工芸、タイピング、コンピューター・ファンやスイミングを選んだ。各クラスは10人前後の生徒で編成され、アメリカ人教師の指導のもとにそれぞれの科目が進められる。キャンプ側のはからいで、T校生徒が1つのクラスに固まらないように編成してくれたため、1クラスに1人ないしは2人の日本人という割り合いであった。キャンプは午後2時45分に全科目が終了し、3時のスクールバスで宿舎に戻るという日課である。

放課後は、つきそい教師の引率でショッピングやフィールド・トリップに出かけた。スミソニアン博物館や議会図書館、動物園、国立公園、近郊の古都市などを見学したり、アメリカ人家庭のガーデン・バーベキューに参加したり、近くの公園やプレイ・グラウンドで近隣の子供達と一緒に遊ぶ時間を過ごした。週末には、2泊3日でアメリカ人家庭にホームステイを行った。ホームステイ先には、できる限り子供のいる家庭が準備され、ここでも同世代のアメリカ人と交流しやすい環境が設定された。

## 結果

**1. 英語の実践学習：** T小学校では週2回の英語学習を行っているが、研修参加生徒達は、さらに12時間の準備学習をうけてキャンプに参加した。キャンプやホームステイで生きた英語に接して、彼らの英語実践がど

のような結果を得たかについて調べてみた。

研修前の予備調査では、英語を使用することの期待感(93.9%)と不安感(84.8%)は相半ばしていた。キャンプ開始の数日間はクラスメートとの会話も少なく、何事にも消極的がちな生徒が多かった。ところがキャンプを通じて、クラスメートとの会話は16人(72.7%)が「とても多かった」と回答し、残りの6人(27.3%)も「多かった」と答えている。積極的に会話を試みているが、17人(77.3%)は相手のいっていることが理解できなかつたり、自分の言いたいことを伝えられない悔しさを自覚した。それでも2週間が過ぎる頃には、6割の生徒が、指導教師や友人のいっている意味が「わかる」と感じるようになった。10人(45.5%)の生徒は、英語が「ある程度、理解できた」といい、3人(13.6%)は「よく理解できた」と答えている。総体的に英語の実践を楽しんだようで、7人(31.9%)の生徒は「ある程度楽しめた」といい、13人(59.1%)は「大いに楽しめた」と答えている。半数以上の生徒が「友人ができて嬉しかった」、「ホームステイを楽しんだ」と回答しているのは英語でのコミュニケーションが通じたことの表れである。英語の実践から、19人(86.4%)が語学力は「絶対に必要」と答え、コミュニケーション能力の必要性を認識した。帰国後3ヶ月の時点で英語学習の意欲を調べると、21人が「とてもある」という積極的な回答をしている。英語にチャレンジし、意思疎通の喜びと悔しさを経験したことは、英語学習にとってかけがえのない刺激をもたらしたことがわかった。

**2. 異文化理解：** アメリカ人の生活と行動様式の観察から、日米文化の相違として次の4点が認識された。

第1は、アメリカ人の考え方や行動様式における相違である。12人(54.6%)が

日米の違いを「大いに感じた」と答えた。具体的な例として、クラスの中や話し合いの場で「何かをしながらでもいいから人の話は聞く」態度、「どんな事でもいいから意見を出している」点、持ち物について「自分たちで必要だと思った物を」持参したり、「人まかせにしない」自主性をあげていた。第2は、日米の家庭文化と生活様式についての相違である。違いを「大いに感じた」11人(50%)は、次のように指摘する。女の子が母親のお菓子作りに手伝う姿を見て感動したり、家族どうしが人の話しをよく聞くことや、自分の意見をはっきり述べることなどであった。「夜になって外で遊んでいる子供はいなかった」、「家族で生活する時間が日本より多かった」という意見もあげられた。第3の日米両国の文化や習慣についてもほぼ同様の結果を得た。13人(59.1%)が、違いを「大いに感じた」と回答した。相違点を大別すると、「どんなことに対しても、はっきりと自分の意見をいうアメリカ人の態度や考え方」、「銃の所持を許す国」、「アメリカの民主主義と自由さ」というものであった。第4にアメリカに対するイメージの変化を調べた。「少し変わった」が7人(31.8%)で、「大いに変わった」が10人(45.5%)という結果であった。変化の内容は、「思っていたよりすばらしい国」というイメージの変化が一番多く、21人(95.5%)を数えた。研修中に出会った人々の明るさや親切さ、あるいは生活環境の中に自然が豊富にあることの発見に基づく意見である。次に多かったのは15人(68.2%)の「思っていたほど恐ろしい国ではなかった」というものであった。ここでは、テロ攻撃を受けたことや、銃による殺傷というイメージに較べて、思った以上に安全で、明るさのみなざる国であることに気づいた結果である。

## 考察

1. **英語の実践学習：** キャンプ中は、毎日1時間のESLクラスに参加し、英語の発音とヒアリング、イディオムの使い方、リーディングなど基本的な英語の学習を行った。その他のクラスも全て英語で行われるが、スポーツ系、アート系、コンピューター系の科目であり、学習していることの目的とプロセスが理解できるように言葉の障害を超えて理解できた。英語力の過不足は大きな問題とならなかったようである。しかしながら、クラスの授業や活動についていく上で、英語を学ぶという受動的な学習法ではなく、相手の言うことを理解し、自分の意見を伝えるために、英語能力を最大限に活用するという能動的な使用法を駆使しなければならなかった。この点は、ホームステイにおいても同様であった。さらに、同世代のアメリカ人と会話できたことは有益なことであった。教師から英語を教わるという指導学習的方法から解放されて、英語をコミュニケーションの手段として実用する体験ができたからである。そのために言葉の通じた時の喜びと、反対にコミュニケーションができなかった時の「悔しさ」を実感することができたのであると思う。。またそれゆえにこそ、英語を続けて学習しよう、という強い意識を導き出したものといえるのではないだろうか。

2. **異文化理解：** 文化の背景を形成する「社会規範」や「生活規範」というものは、知識として学ぶだけでなく、社会生活を通して学習し、理解し、受容していくものであるから、2週間という短期間では、これらの規範を理解することは無理であったようだ。規範というものを理解するレベルにはいたらなかったのである。しかしながら、サマースクール・キャンプという学校組織が主催する教育プログラムに参加し、その中で決められたルールを理解し、義務を遂行するという基礎的な「社会規範」を学習できたといえよう。

アメリカ人の学校生活という場における教師と生徒の交流、それぞれの責任分担やルールの遵守というものを観察できたからである。また日常生活の場であるアメリカ人家庭に入り、親子関係の営みとともに、アメリカ人の日常の思考法や行動様式を体験することもできた。これらの体験を通して、アメリカ人の国民性や行動様式を直に観察できたことは大きな収穫であった。とりわけ同世代のアメリカ人が、自分の意見を述べる態度や自主性というものを見聞して、自他の文化の違いを認識できたことは得難い経験であった。

この研修プログラムは、異文化理解のための基本概念を十分に学習できたといえる。

## おわりに

アメリカのサマースクール・キャンプという教育プログラムにおいて、文化的背景や資質の異なる生徒どうしが同一の体験を共にすることは、教室内の授業や教科書から学ぶ教育では図れないほどの教育効果をもっていることがわかる。

まずは、言語の学習における効果である。教室内で学ぶ英語という性格を越えて、実際の活動の中で生きた言葉として学ぶことができた。さらにアメリカの学校生活や日常生活の場に参加し、彼らの国民性や行動様式を直に観察したことは、自他の文化や慣習の相違を考えるための生きた教材になったはずである。

従来の語学研修やホームステイ研修では、このような学習体験が容易に達成されにくいことを考えると、T小学校のサマースクール・キャンプ参加は、非常に革新的な研修プログラムであるといえよう。重要なことは、この異文化体験研修で培った体験と認識を次なるステップに繋げ、異文化を理解する能力と資質を向上させていくことである。

## 参考文献

- 「現代のエスプリ NO. 299」至文堂、1992
- 「現代のエスプリ NO. 322」至文堂、1994
- 「異文化間教育 2」アカデミア出版、1998
- 「異文化間教育 6」アカデミア出版会、1992
- 岩波講座 11 「現代の教育 国際化時代の教育」岩波書店、1998
- 江淵一公「異文化間教育研究入門」、玉川大学出版部、1997
- ドナルド・キーン「少し耳の痛くなる話」新潮社版、1987
- 「異文化コミュニケーション」SIETARJAPAN 1999
- William Darrow「Greater Oexpectations」THE FREE PRESS、1995

1、サマーキャンプ参加にあたり：

1-1「サマーキャンプに参加し、英語を試してみる期待感はどの位ありますか？」

あまり期待していない	2人	6.1%
少しは期待している	13人	39.4%
大いに期待している	18人	54.5%
合計	33人	100%

1-2、「サマー・キャンプで言葉の通じない不安はどの位ありますか？」

あまり不安はない	5人	15.2%
少し不安	10人	30.3%
大いに期待している	18人	54.5%
合計	33人	100%

2. 英語の実践について：

2-1、「アメリカ人の参加者と英語で会話をする機会がありましたか？」

あまりできなかった	0人	0%
少しはできた	6人	27.3%
大いにできた	16人	72.7%
合計	22人	100%

2-2、「研修中、英語が通じなくて悔しいと思ったことがありましたか？」

ものすごく悔しかった	10人	45.5%
少し悔しかった	7人	31.8%
あまり悔しくなかった	5人	22.7%
合計	22人	100%

2-3、「キャンプ中、英語が理解できましたか？」

全くできなかった	1人	4.5%
あまりできなかった	2人	9.1%
少ししかできなかった	6人	27.3%
ある程度できた	10人	45.5%
良くできた	3人	13.6%
合計	22人	100%

2-4、「英語でのコミュニケーションを楽しむことができましたか？」

全くできなかった	0人	0%
あまりできなかった	1人	4.5%
少ししかできなかった	1人	4.5%
ある程度できた	7人	31.9%
良くできた	13人	59.1%
合計	22人	100%

2-5、「外国人とコミュニケーションができるだけの語学力をつけることは必要だと思いましたか？」

絶対に必要	19人	86.4%
ある程度必要	3人	13.6%
あまり必要ない	0人	0%
合計	22人	100%

2-6、「帰国後3ヶ月が過ぎた今でも英語を勉強しようという意思はありますか？」

とてもある	21人	95.5%
少しはある	1人	4.5%
あまりない	0人	0%
合計	22人	100%

3. 異文化理解について：

3-1、「日米の同年代の人に、考え方や行動面で違いを感じましたか？」

あまり感じなかった	0人	0%
少しは感じた	1人	4.5%
ある程度感じた	2人	9.1%
だいぶ感じた	7人	31.8%
大いに感じた	12人	54.6%
合計	22人	100%

3-2、「日米の家庭文化と生活様式に違いを感じましたか？」

あまり感じなかった	0人	0%
少しは感じた	1人	4.5%
ある程度感じた	4人	18.2%
だいぶ感じた	6人	27.3%
大いに感じた	11人	50.0%
合計	22人	100%

3-3、「日米の文化や習慣に違いを感じましたか？」

あまり感じなかった	0人	0%
合計	22人	100%

3-4、「研修に参加して、アメリカの文化や社会が少し理解できたと思いますか？」

理解できたと思う	21人	95.5%
よくわからなかった	1人	4.5%
あまり理解できなかった	0人	0%
合計	22人	100%

3-5、「アメリカを見て、アメリカのイメージは変わりましたか？」

大いに変わった	10人	45.5%
少し変わった	7人	31.8%
あまり変わらなかった	5人	22.7%
合計	22人	100%

3-6、「アメリカのイメージはどのように変わりましたか？」

- 思っていたよりすばらしい国だった (21人、95.5%)
- アメリカ人は明るく親切 (3人)
- 自然が豊富であった (2人)
- 思っていたほど恐ろしい国ではなかった (15人、68.2%)
- テロや銃の国と思っていたが、思ったよりは安全で明るい国 (6人)
- テロ攻撃を受けたというイメージはなかった (2人)